

## (二) 大学・短大卒業生

今も励ましてくださるおふくろさん

河野武子  
(旧姓成長)

卒業して二十年、小学三年の長男を頭に三人の母親になり、四十の峠が眼の前にぶら下がり、やっと親の気持ちにわかり始めました。日頃、私が幸せに思うことは、常に二人の母親が励ましてくれることです。それは、ふる里の親と、母校の肝っ玉母さん(おふくろさん)の愛のムチに打たれながら暮しているからです。

寮生活をしていた私には、はっきりいって、苦しい、いやだの高校生活でした。寮則の厳しさ、狭い部屋での集団生活、礼儀作法、共同炊事、労作など。その上に、しつこいほどのおふくろさんの訓話、当時は説教としか

受けとれませんでした。おふくろさんは、床につきつても、武田教育を説く。正座の足はしびれ切つて玄関をまくれての退室。何度くり返したことでしょ。部屋にかえれば腹が立ち、腹が立ち、くやし涙を流し翌朝そっと庭ばきを取りに行ったこと。台風の時、河川の氾濫が気になりゆっくり床につけず、おにぎりをはぎって校舎へ避難した寮生活。魅力のあるはずがありません。

しかし今の私には、まさに流れをかえて一コマ一コマが懐かしく思い出され、為せば成る、為せば成る”と白メガネの底から、やさしい笑顔で声をかけてくださるおふくろさん。まさに、不思議な力をお持ちの親なのです。

中国山地の山あい、そんなおふくろさんの愛のムチに支えられながら、福祉の道に精一杯生きている私で

す。

(短期大学部被服科昭和四十年卒)

## なつかしき第二の故郷

塚本知子

(旧姓石田)

服飾学科の学生として二年、副手として二年、この中でも何よりなつかしいのは、可部の自然です。

春、鶯が手の届くような所で鳴き、夏は、新川橋の下で、河鹿が美しい声を聞かせてくれる。秋、山々のみどとな紅葉、冬は、校庭で大きな雪ダルマができるくらい積もる雪。アスファルトの中で生まれ育ったような私にとっては、珍しいものばかりでした。

そして、そのすばらしい自然の中で育まれた校風のせいか、学生は純情でまじめな者が多かったようです。先日も福山の保健所に実習に来ていた学生さんにお会いしましたが、「変わっていないな」と感じました。大切

にしたい校風です。

私の人生の中では、この大学での四年間は大きな転機となった気がします。人前に出るのが苦手で、引っ込み思案だった私が、人前でもあがらない度胸を持てました。

服飾学科という事で、夏・冬の休暇も、残って仕上げをするほど忙しい中で、オリゼミ・大学祭の実行委員会に参加し、貴重な社会勉強をさせていただきました。先生方は、手の遅い私にも親身になって、教えてくださいました。山本先生、岡田先生、沢先生等、すばらしい先生ばかりでした。卒業前になって、恩師の岡田先生が病気にいられて、卒業式の答辞を読ませていただいた時に、思わず涙ぐんでしまったのも、昨日のことのようです。

副手として勤務させていただいてからは、気がつかない私のことゆえ、先生方にご迷惑をかけましたが、やさしくご指導してくださいました。学生たちが放課後残って裁縫したりしますので、毎日帰るのは暗くなってから

でしたが、充実した日々でした。いろんな先生の副手に  
ついて、いろんなことを学び得ました。

また、夏休暇中の司書講習で、他の副手さんたちと一緒に、六十人分の定食を作り、料理のレパトリーも増え、手早くになりました。集中講義の先生のお世話を宿舎に泊まり込んでさせていただったり、布団を作ったり、カーテンを縫ったりしました。当時はつらいと思うこともありましたが、今考えますと、楽しいことばかりだったような気がします。すばらしい人生経験となりました。

心の中で、すぐに鮮かに思い出すことができるなつかしき第二の故郷です。どうぞあのままで、変わらないで欲しいと願うばかりです。今は二児の母となり、忙しい毎日を過ごしていますが、手があいたら訪ずれてみたいと思っています。

(短期大学部服飾学科昭和四十九年卒)

## 心に残ったことば

六郎万幸 枝  
(旧姓井原)

このたび、武田学園創立三十五周年にあたり、思い出の記を書くように勧めがあり、あまりの懐かしさに、一月四日、三人の子供を連れ、徳山から可部へ出かけました。

正月休暇中のこととて、人影はみられないものの、当時のことを思い出すことすらできないほど立派に変わった大学や周りの姿に、私は茫然となりました。安佐市民病院となった私たちの学舎、可部の街や社会の姿貌に、まるで浦島太郎になったような気持ちでした。卒業以来十六年、母校はずいぶん発展しており、その折々のご苦労は知る由もありませんが、パッと、白煙の立ちあがった後の世界には、やはり旧校舎の空池から、赤レンガを積んだ彫刻や、当時の先生方の顔が浮かんできます。計らずも、かくしゃくとした学長先生と武田学千先生にお会い

し、ほんとうに懐かしい学生時代に返っていききました。人生にはさまざまな出会いがあると申しますが、私が文教で過ごした時代は文字通り青春で、多くの人たちの「出会い」があり、深く心に残る数々の「ことば」があります。

共に学んだ級の人たちや教えてくださった先生方のごとなど、年を重ねるにつれて、とても懐かしく思い出されます。いつの日にか、一堂に会し、昔話に花を咲かせたいと願うのは私だけではないと思います。

私は昭和四十年四月十日、可部女子短期大学食物栄養科栄養専攻に入学しました。同級生には益田市の懐さん、大島郡の浜本さん、神石郡の近田さん等々、遠く各地から志を同じくし、夢と希望に眼を輝かせて多くの人が集まっています。こんな私たちが入学の浮かれ気分である時、出崎先生から、「栄養士の士は武士の士と書き、教師・調理師の師とは違います。学問・人格・才能のある立派な人を意味しているから、心を引き締め、二年間という短期間に努力して取れる免許はできるだけ取

るように……」と、一喝浴びせられた時の驚きは、今も心に残っています。従順だった私たちは、次の日から授業に、実験・実習に明け暮れ、朝は五時から、また放課後は夜八時九時までの個人演習などを続け、二年間に八十九単位も取得し、ほとんどの人が栄養士と中学校教諭二級免許状をいただくことができました。今思うと、あの過密なスケジュールがこなせたのは、若さだけではなかったと思われれます。それは、たびたび教室に足を運ばれ、「為せば成る、為さねば成らぬ何事も、成らぬは人の為さぬなりけり」の根性を説かれ、自ら実行された学長先生のお姿とおことばのゆえであらうと信じます。小柄なお身体に、当時はまだギブスをはめておられ、お仕事に精を出し、己れの信念に生きておられる学長先生のお姿は、今も深い感銘をもって思い出されます。そして出崎先生の厳しさと、豊後先生のやさしい微笑に支えられ、私たちは成長することができました。

当時の授業は、現在の安佐市民病院の中島校舎と上原校舎の両方で行われ、両校舎を往復する土手は狭く、草

や木が両側から覆いかぶさり、所々に竹の切り株がのぞいていました。校舎の周りの桑畑や街の風景も今と違って、のどかで、のんびりしていましたが、学ぶ私たちは必死であったように思います。二年生の夏、栄養士のための校外実習が始まった時は、学内の厳しさ以上のものがあり、また収穫も大きなものがありました。秋には「第五回広島文教女子大学大学祭」が『創造』というテーマで開催されました。この大学祭は、学名変更した新しい飛躍の年の祭であり、私たちは若い魂をぶっつけ合いい、汗と涙で若さを燃焼しつくしました。特に私は執行部の一員として企画運営にあたりましたが、この時のことが現在の生活に大いに役立っています。

卒業後二年間、今は亡き竹吉先生や、退職された大谷先生の部屋で、副手としてお世話になりました。この間のことは、また学生時代とは違ったいろいろな勉強をさせていただきました。

かくもすばらしい思い出の場、武田学園に向けて「牛の尻っぱになるよりも、鶏の頭になれ」と羽ばたくよう

に勤めてくださったのは高校の先生でした。武田学園で出会った方々との貴重な体験が、消極的であった私の人間形成の上で、大変重要な役割を果たしたと思います。

可部に都合四年住んだ後、縁あって徳山に嫁ぎ、現在は、主人・三人の子供・姑と共ににぎやかな日々を過しています。夢にみた栄養士を職とする志を遂げることはできませんでしたが、明るい家庭を築き、現在は栄養推進委員として、微力ながら、徳山市民の健康づくりのために努力しています。私がここまでやってこられたのは、武田学園で出会った多くの人たちの心を受けたからだと感謝し、これからも武田精神を胸に、私のできることでお返しするつもりでがんばって生きていこうと思います。

(短期大学部食物栄養学科昭和四十二年度卒)

## 学園の教えを子供たちに

児玉慶子  
(旧姓白市)

学園が広島県可部女子専門学校として昭和二十三年四月十五日発足され現在に至るとお聞きし、「あら、学園は私とおない年」、私は学園と共に歩み出したのかと思いませんと、何倍、何十倍、何百倍にも喜びが脹れあがってきます。

私は昭和二十三年三月に多くの願いを込められ生を受け、今年三十五歳を迎えようとしています。学園もわが子を生み育てる母のように、いろいろな願いを込められ発足したことでしょう。私も二児の母となり、それはそれは百面相の毎日です。それを思うと、教育者である諸先生方のご苦労は、口にはいづくことができないものであったことでしょう。私にとり、あのすばらしい自然の中での五年間の学園生活は、宝となっていています。

現代のようなメディアの発達、テレビ文化、活字文化、新たな情報を洪水のように流していく情報過多といった社会の中で成長していかねばならない子供たちを見ていますと、私は子供と共にとまどうことがしばしばあります。しかし私は、私なりに私自身に対し、子供に対し、いろいろと考えてみるのです。そのような時、学園の教訓が目的意識を持たせてくれます。真理をきわめ、正義に生き、勤労を愛する人になりましょう。責任感の強い逞しい実践力のある人になりましょう。謙虚で優雅な人になりましょう。とある学園訓。この教訓を私は望ましい人間像とし、一歩でも近づきたいものだと思っています。

現代人の目的は、社会組織の善良な一員として、社会奉仕のためのリーダーシップが取れる人間になれるか、社会組織人としていかに多くの人のリーダーシップを取れるかにあると思うのです。このためには、男女を問わず、若人・老人にも、都会の人、田舎の人にも、世界各国の人にも、全ての人々に愛され、全ての人に感じの良

い人だといわれる人間像を築き上げることだと思いません。

学園生活を今思い出しますと、どうしてもっとあの貴重な青春時代を大切に使わなかったのかと思うばかりです。ただ、すばらしい学園訓にめぐりあえ、私は私なりに目的意識を持つことができたことには、大変感謝しています。私も母となり、子供を思う親となりました。生徒・学生を思い教育する学園も、同じような思いでこられたのではないかと思います。学園訓が私の望ましい人間像で終ることなく、子供たちに何百分の一でも具体化できるようにしたいと思っています。

(短期大学部食物栄養学科昭和四十三年度卒)

思いつくままに

秋山妙子  
(旧姓森山)

十年ひと昔、早いもので卒業して十三年の歳月が流れます。人並みに結婚、出産、育児と続き、ようやく人生

が少しずつわかりかけてきたこの頃です。

向こうみずで、血気盛んな十代後半を過ごした懐かしい日々……。入学当時、短期大学部は可部町中島にあり、可部町上原にある大学とは離れていました。当時科長は、今は亡き竹吉先生——とても紳士で背すじをピンと伸ばして、きどって歩かれるお姿が目には浮かびます。何かの折、天満屋にお供をして、黒の皮手袋をいただき、なにゆえかそれがとても印象的で、毎年冬の訪れと共に愛用のこの手袋に思いをめぐらせ、故人となられた先生のことかしのべれます——そして、当時の栄養学科の「目的的存在の出崎先生、ふっくらとやさしく親しみ深い豊後先生、おしとやかな三浦先生が中心でした。短期大学部は大学生活をエンジョイするどころか、いつもギッシリとハードでした。出崎先生のあの小さな身体より溢れる程の情熱に、われわれ学生はビリビリしていました。広島文教女子大学の栄養学科を他に秀いだものになすべく、夢と理想をかかげ懸命に努力され苦悩される姿に心をうたれました。今にして思えば、歴史の

ないところに基礎を築くべく奔走されていたのだと思います。  
ます。

卒業後、縁あって副手としてお世話になり、私にとつて初めての寮生活を経験することになりました。中島の橋のたもとにある出崎先生別宅（学生同志の呼び名）の寮が最初でした。ある日、寮の食事に、デザートとして四つ割りのリングゴが出ました。もちろん皮つき芯つきです。食べ進んで行きますと種が一粒五ミリ程の白い根をのばしています。早速、記念樹と称し、植木鉢に植えました。ところが不思議なことに、芽をのぞかせたのです。出崎寮のネギ畑に移植させてもらい、暑い夏もグングンと葉の数を増やしました。ちょうどその頃、出崎先生が寮の舎監を兼務されることになり、私もそしてリングゴの木も一緒に淳風寮へと移りました。食堂と寮の間の焼却炉の近くに移植しました。背後に山がせまり気候的にあっていたのか、そこでもグングンと大きくなり一メートル以上になったのは記憶しています……。私にとってこのリングゴの影響は大きく、一粒の種の生命力に心

動かされ励まされ、その後も強く私の心に残り、物の考え方の基礎となりました。

現実の幸せな日々の生活を思う時、まだ十代の柔らい頭に、人間生活の最も基本的な食に対する姿勢を学んだことを、とても嬉しく思い、ご教授くださった先生方と、この学舎に縁のあったことを感謝しています。

（短期大学部食物栄養学科昭和四十五年卒）

## 短かすぎた二年間

上川 寿美枝

私は、広島文教女子大学短期大学部食物栄養学科食品管理コース（食物専攻の改名）の第一回生、卒業後はや二年が過ぎました。現在、湧永薬品株式会社に勤めています。大学に進学する時は、義務教育や高校進学とは違って、ほとんどの人は自分の意志で将来の目標をもって、大学や学部を選択するのだと思います。私の場合を思い出してみますと、大学は実社会に出る準備期と考え



ていました。それゆえ、卒業後の就職のことを考えて、主として食品検査関係に働く者の養成である食品管理コースを選びました。そうして卒業後は、希望どおりこの道に就職しました。

大学時代は単に教養を身につける以上に、食品管理者となる専門的な勉強がたくさんあって、つらいつらいと思つて過しました。しかし思い出してみると、学ぶものがたくさんあったと思います。学生時代は、つらいといつても、授業中は先生のご指導のもとに勉強すれば良いわけでしたから、これといつて迷いためらうことも少ない時代です。でも、先生方からは「常に問題意識を持つて、自から求め、開拓しようとする気を持つて、これがないと大学生とはいえないのだ」と事にふれ聞かされてきました。しかし、文教は家庭的な雰囲気があり、先生方の親切なご指導に甘え、常に受け身の姿勢で穏やかな学生生活を送りました。

実社会は想像以上に厳しく、安易な気持ちでは決して通用しない仕組みになっていくと痛感しました。そこで

改めて、短期大学というこの短かすぎる二年間、私はどう過していたのだろうかと反省しています。就職の準備、結婚する前の一段階……等々、いずれにしても甘い時代であつたのでしょうか。毎日の厳しい会社業務の中で、なんとかがんばろうとまだ悩んでいます。これから一層のご指導をお願いいたします。

(短期大学部食品管理コース昭和五十六年卒)

## 川の流れる町で

浜崎 悟美

島育ちの私には、川の流れる町は異郷でした。

初めて可部を訪れたのは、ひと昔以上も前のことです。昭和四十五年二月十日、入学試験の日でした。市内バスセンターから「可部・大林線」の満員バスに乗り、一時間以上かかったと思う。バスが郊外へ進むにつれて、雪が散らつき始め、そして北風に白く舞い、積雪も増している。温暖な小豆島から、雪ふる町にやって来た

者には、その雪が心引かれるものであり、また未知の不安を感じさせるものでもあった。しかし、それは何よりも、新しい希望を叶えてくれる象徴でした。

武田学園前でバスを下車したのですが、見渡しても校舎らしいものはないのです。背中側は太田川ですので、前を向いて歩いた。勤に頼って線路を渡ったところで学園が見えた。そこで大学の所在地を尋ねる。高校のグラウンドを縦断し坂が上がった。土手に出てきた。「なんと長い土手なんだ」耳が冷めたく痛い、身が自然に前かがみになる。歩いても歩いても石ころ道は続き、大学は遠かった。

島の川は、山からすぐ海へつながる細く短い川です。それに比べると、こんもりと土手をなした根の谷川は驚きでした。

試験の第一日目のテストのことはあまり覚えていませんが、翌日の面接のことは記憶している。緊張してドアを開けると、真正面に山内先生が悠然としておられ、その横に楨林先生がここにこしておられた。主に楨林先生

が話され、山内先生は二、三質問なさったと思う。この面接で、私はこの学校へ入学したいと思った。感性だけで決めるのは軽薄だが、この二人の先生にお会いして、何か得たいと思ったからです。

入学式の日、山内先生が担任してくださると知り、とても感激したものです。でも、私は短期大学部で、時間は少ない、教えていただけるものも限られているため、身につける間もなく、卒業してしまいました。それを今も残念に思います。

入学し、寮生活もわかりかけて一カ月もしないうち、海が無性に恋しくなった。部屋の窓からも、屋上からも、山が見えるばかりだった。それは、胸がしめつけられるほど窮屈なことでした。仕方なく根の谷川に散歩に出かけ、ぼんやり川面を見つめていた。夏は、裸足をひたし水遊びや石投げを楽しみ、秋冬は、海と同様に霧が立ちこめるのを知り、珍しく思ったものです。

一年生の書道の授業は、先生の都合で、高校で受けていた。午後からのその授業に、長い土手を何度往復した

でしょう。その間に、根の谷川橋が木造から仮橋に、そして鉄筋に作りかえられていったのです。

太田川へもよく散歩に出かけたものです。バス停近くの山口アパートに友人がいて、彼女と先輩と三人連れだつて、川原で食べたり歌ったりした。向う岸に乗馬クラブがあり、鉄橋を渡って一度見に出かけたことがある。

そばで馬と顔を向い会わずと、その荒々しい勢に恐れ入り、二度と行くことはなかったが、対岸から、しなやかな馬の動きをじっと眺めたものです。

鉄橋下の河川敷には、自動車教習場があったが、そこへ文教の学生が通っているとか、他でも免許を取ったという話はあまり聞かなかった。その頃は、先生方も自家用車で来られるのは稀で、電車やバスを利用しておられたように思う。先生も学生も同様に、ほこり立つジャリ道を歩き、穴ぼこだらけの土手を通っていた。

駅まで直線距離は近くても、川が間に流れているので、回り道をしなければならぬ。まどろっこしいほど遠く感じる道のりを、とぼとぼ歩いていくのが、大学へ

の道でした。道端の草花、一面の桑畑、誰れが住んでいるのか全く関心のなかったアパートの棟が、土手付近の風景でした。

今は、すべてが懐かしい。

(短期大学部国文学科昭和四十七年卒)

## わが青春の一ページ

小 谷 典 子  
(旧姓常松)

早いもので、短大を卒業して九年が過ぎようとしています。思えば、あの親元を離れての二年間で、ずい分と身も心も成長したような気がします。

一年生の時は寮生活。新入生二人に先輩一人の三人部屋で寝食を共にするわけですが、もちろんお互い初めての経験で、不安で一杯でした。それでも、お風呂に一緒にはいったり、廊下に並んで点呼をしたりするうちに、すぐうち溶けて、女三人寄れば姦しいのが、十人も二十人も集まっているのですから、にぎやかなことこの上な

し。試験時期になれば、夜遅くまで勉強(ウ)に励み、なにせ育ち盛りのものですから、寮の夕食で足りるはずもなく、やおら電気コンロを持ち出しラーメン、おかゆ、おにぎり作り。家でお米を作っている友だちのところから新米が送ってくると、「それっ！」とばかりに作業が始まるという次第。おかゆにおかかをかけてしょう油で食べるだけなのですが、これがまたなんともいえずおいしく、太ることも忘れて毎夜セッセと食べたものでした。

二年生になると、住み慣れた寮を追い出され(ウ)、こられた初体験の下宿生活。その当時は、畳一畳千円の見当で、四畳半なら四千円から五千円で、六畳なら六千円から七千円で借りることができました。下宿家をやっている家も多く、そう苦勞せずに見つけることができ、六畳にえん側がついて、共同の炊事場のある部屋を友達と二人で借りることにしました。この部屋での思い出は、書き並べればそれこそ本が一冊できあがるくらいです。寮時代の友だちを集めて、クリスマスパーティーをした

り、毎夜お目見えになるゴキブリと奮戦したり、物干し台にあらがって星を眺めたり、隣の先輩の作詞作曲の歌を合奏したり……。

今でもその時の友人に出逢うと、必ずこの下宿屋での話が出ます。あのお好み焼き屋のおじちゃんは無気だろうか? 『づいちゃんの店』はまだあるんだろうか? あのスーパーは——と、つきることなく想い出話に花を咲かせるのです。「今日の晩ご飯のおかずは何にしようか、ちょっとでも安くあげて……待て待て、栄養不足になりはしないか、ウン、ちょっと張り込んで肉入りカレーだ」と、考えてみれば、今以上に生活そのものだったような気がします。

もう二年大学に残る予定が、二年の年明けと共に急にホームシックにかかり、そのまま卒業。何ゆえか海辺の町に嫁ぎ、不慣れた育児に振り回されている現在です。

ともあれ、私の一生のうちでさらさら輝き出した時期で、いつまでこの輝きが保てるか(今でももちろん輝いているつもりです)、いつまで輝き通すが、当面の課

題です。それと、一年でも早く国文学会に参加したい気持ちで一杯です。

(短期大学部国文学科昭和四十九年卒)

## 青春の二年間

神田京子  
(旧姓稲吉)

武田ミキ学長先生から、一人一人に卒業証書を手渡されて、もう十六年余が過ぎました。そしてこの十六年という長い年月に、われながら驚いています。私たちは、可部女子短期大学英文科の第一期生として入学したのですが、まるで昨日のことのように諸先生方のお顔や、講義の端々が思い起こされ、青春の二年間が懐かしく、友人たちの顔や笑声が脳裏を横切ります。

これで本当に大学生になったと実感した入学式での宣誓書への記名、そして新入生歓迎遠足などは、忘れられない思い出です。歓迎遠足は、一回生の時はチチャスハイパークに、二回生の時は岩国へ、と少人数ならではの

行事の中で、先生方との親睦も深まり、意義深い遠足となりました。英文学科の第一期生としての立場では、当時設備の不完全さを新聞に投稿した友人もいましたが、それも各個人々の受け入れ方一つだったと思っています。

もう一つ思い出深いのは大学祭です。一回生の時には英語劇に取り組みました。劇は“Say It With Flowers”でした。出演者および数名の各進行係の他は、静観の体がありました。皆一生懸命でした。われわれだけの力で進めて行きましたが、その割に、先生方の評はあまり良くなく、私自身の失敗を含め、他の人たちに申し訳なく思ったものでした。二回生の時には、課題を「シェイクスピア時代の舞台」とし、舞台および観客席の模型を造り、小さいながら皆が力を合わせて一応それらしい形ができ上がりました。この舞台造りには本当に苦労し、素材を何にするか、設計図を作り、素材集めに走り廻り、釘一本も思いを込めて打ちました。大学祭が終わって作品をこわす時には、保存できないものかと、二、三

の友人と話しあったものです。また先日、英文学会機関誌 *Litium* で知りましたが、恩師浅地昇先生が一年お亡くなりになったとの事、残念でたまりません。私

共在学中もご高齡でしたが、いつも背を延ばして、手を耳にあててのご講義のお姿は忘れられません。個人的には謡曲クラブでお世話になりました。冬の寒い時も、空室に坐り、熱心に指導していただきました。夏の合宿での昼食に素麵を出しましたら、ことの外喜んでくださった事を特に記憶しております。いつも黒いこうもり傘を手に、橋を渡って来られたお姿が、思い起こされます。シェイクスピアをご講義される事もあり、さきの舞台模型と、それにつけた解説を一番熱心に観てくださったのも、浅地先生でした。ご冥福を心からお祈りします。

毎年、大学祭には案内状を受けますが、年毎に盛大になって行く様子を見るにつけ、武田ミキ学長先生の常の金言「為せば成る……」が、強く心によみがえってきます。卒業後、社会人として、家庭に入ってから、困難に出合い頭を打つたびに、この詞を思い起こしてきまし

た。本当にこの言葉は人生の上で、何事においても大切な言葉だと痛感します。

(短期大学部英文学科昭和四十二年度卒)

## 短大一期生の思い出

延岡憲子

(旧姓中村)

私は、可部女子短期大学英文科に入学し、広島文教女子大学短期大学部英文科の第一期生として卒業しました。大学も過渡期にあり、二年間はあっという間に過ぎ去りました。

新校舎へ移転したのは、二年生の時でした。校舎の回りは山と畑ばかりで、冬の帰り道などは一段と暗く、淋しいものでした。そんな日も、級友と肩を寄せ合って、大声で歌ったり、おしゃべりをして帰ったことを懐かしく思い出します。そして、新校舎といっても、学習するための教室があるだけで、体育館や食堂など何一つありませんでした。それだけに、いろいろと不自由な中で、

日夜、大学発展のために努力しておられた先生方の熱心なお姿に接し、私たち学生も、奮起して勉強しなければならぬと思わずにはおられませんでした。

その一つに、卒論があります。卒論というにはあまりにも恥かしいものでしたが、先生方の熱心なご指導を受けて、私たち年々の二年間の学習のまとめができたことは、この上ない喜びでした。また、ある放課後や休日に、新しく購入された図書館の本の整理などお手伝いし、乙女心に胸をはずませながら、先生方と楽しい語りができたことも、良き思い出の一つです。

でも、一番の思い出は、二年生の時の文化祭です。その一つに、私たちの教室いっぱい、『シェークスピアの舞台』を再現したことです。一枚の古い写真をもとに、やっとの思いで設計図を作成し、クラス全員で力を合わせて、ベニヤ板を材料にし、俄か大工で作りあげました。色を塗り、ニスをかけて完成させた時の喜びは、今もはっきり覚えております。もう一つ、当時、唯一の同好会であった謡曲クラブに加入し、高齢にもかかわら

ず、かくしゃくとしておられた浅地昇先生の熱心な指導を受けておりました。そこで、その成果として、文化祭に『羽衣』と『紅葉狩り』を発表することができました。この時の強烈な感激は、生まれてはじめて着物を着たという窮屈さと共に、今でも忘れられない思い出になりました。

最後に一つ、お礼申し上げたいことがあります。それは、一年生の時、武田ミキ学長先生のお計らいで、一年間、英文科の学生にも、課外講義として、調理の時間を組んでいただいたことです。今は、二児の母として育児と福祉の仕事に毎日追われておりますが、当時身につけた料理をする楽しさやコツが、今の私に大変役立っております。学長先生、並びに直接ご指導くださった吉沢先生に、心からお礼を申し上げます。

(短期大学部英文学科昭和四十二年卒)

## 幼児教育学科と私

吉 田 久美子  
(旧姓伊藤)

月日が流れるのは早いもので、卒業してもう十一年も経ってしまった。「保母になりたい」という強い願望を達成するために、本学幼児教育学科を選んだ。

当時、幼児教育学科は新設されたばかりで、私たち五十名のクラスメートが一期生としてスタートしたばかりであった。学舎はまだ建設中であり、当分の間、現在の安佐市民病院の場所にあった附属高校の校舎にクラスルームがおかれていた。ほとんどの講義は、根の谷川にかかる橋を渡り、山の上の採石場の音を聞き、友と雑談しながら、砂利道となっていた土手を歩いて大学のキャンパスの方へ通っていたものであった。しかし、それも約一カ月半くらいで幼児教育学科を含めた新学舎が完成し、それまでの不便も解消された。待望のピアノレッスン室からは、真新しいピアノの音色が、幼児教育学科こ

こにあり、とうたっているようで、学科全体は活気に満ちていた。ところが、自分にとっては、苦惱の日々の始まりであった。この学科に入学するまでは、ピアノの訓練をほとんどやっておらず、音楽担当の諸先生方には大変お世話になり、相当厳しく鍛えられたものであった。

友人は、夏休暇を利用して北海道へ研修旅行に行き、はしゃいでいるというのに、自分はいえ、練習不足のために曲が仕上がらず、休みを返上しての個人レッスンでピアノの練習にあけくれ、随分わびしい思いをしたものであった。

学生生活も軌道に乗り多少ともゆとりが出てくるようになる、サークル活動にも目が向くようになり、ラルカンシェールに籍をおいた。コーラスの楽しさを味わうとともに、合宿を通しての人間的交流や、マネージャーとしての他大学との交流などにより、自分自身はかなり成長させてもらったようである。しかし、その当時のわが部は人数不足に悩まされ、特に演奏会が近づくと練習と人集めにまさに東奔西走であった。学科の仲間に応援



をたのんで、即席の大コーラス部として演奏会にのぞんだこともあった。

学友会主催の夏の学内セミナーの思い出も多く残っている。沼田の工大山荘でのセミナーでは、仲間や諸先生方と親しく語り合い交流を深めることができた。特に担任の先生との起居をともした経験とか、意気投合した友人や先生と帰途、広島のあるお店でビールを飲んだことは印象強く記憶している。先生とは、もう何年もお会いしていないが、お元気でいらっしゃるのでしょうか。毎年いただいている年賀状が、唯一の楽しみである。現場との最初の出会いである附属幼稚園での実習では、保育という仕事がいかに魅力あるものか、どれだけ大変な仕事であるかということを学んだように思う。特にここでは絵本の世界に魅せられ、今では四児の母親となった私にとって、それが子どもたちとふれ合う機会を深める重要な役割を果たしてくれている。

広島文教女子大学で学んできた多くのことを生かしながら、現在の自分の立場である妻・母・嫁・保母という

四役を、たゆまぬ努力を重ねて精進していきたいと思っている今日である。

(短期大学部幼児教育学科昭和四十七年卒業)

今、私が考えること

広瀬 裕美子  
(旧姓緒方)

学生時代には専門課目の授業が多かったのを思い出します。そのため、グループで、または個人的にお互いを見つめ合い、認め合っていく機会に恵まれていたと思います。特に、音楽(ピアノ)、図画工作、体育、附属幼稚園での実習などは印象的です。得意・不得意はありましたが、それぞれに皆一生懸命がんばっていました。そんな中で私は、得意課目もなく、果たしてこの学科は自分に向いているのであろうかと悩む事もありました。しかし、附属幼稚園児の元気に遊ぶ姿や顔を見る度に、彼らがかわいくて、『やはり、子供が大好きなんだ。このあがない子供たちのため、少しでも役に立ちたい。』とが

んはりました。その気持ちは、卒業してからも今もあまり変わりません。しかし、最近の子供は知能発達が早められたせいもあるでしょうが、自分が考え、求める子供らしい純粋さが欠けてきたようで少し残念です。時代の風潮だからと片づけるにはあまりに無責任に思えます。

だからといって、この問題に対しては、特別効果的な解決方法も思い当たりません。せめて自分たちだけではしつかりしたいものと思っただけから心掛けています。

私は卒業後、五年間保育園に勤務し、現在は二児の母親であり、主婦專業となっております。育児の点では学生時代学んだ事、職場で経験した事など、大きく参考になりますので助かっています。例えば、子供の成長、環境、病気など、その都度あわてず見守ってやることができるからです。時々感情的になっている自分に気づき、反省する事もあります。長男(二歳十ヵ月)が敏感に感じ取るようになりましたので、気分をひきしめて、これからも子育てに専念していくつもりであります。

卒業してもう十年が過ぎようとしています。しかし、

なつかしい思い出も、私にとってはまだ最近の出来事のように、皆様の顔や名前がはつきりと浮かんできます。これからも、それぞれの道を精一杯歩いていきましょう。

(短期大学部幼児教育学科昭和四十九年卒業)

## 保育の道を歩みつ

平田京子

昭和五十年三月広島文教女子大学短期大学部幼児教育学科を卒業して以来、今日まで同じ保育園に勤務しております。この保育園は、仏教法人によって設立されており、仏教保育を主流としています。このように宗教を背景とする保育といえば、一般の幼児教育とは異なった世界のように考えられますが、「命を大切にする」という意味では全く違いはありません。いわば、命を預かって保育をしているのです。

子供たちにとって、保育園とか幼稚園は、最初に出会

う組織的な社会です。ここでは「先生」との出会いがあります。「先生」は、子供たちにとって、両親よりもずっと絶対的な存在になることが多いようです。子供は先生がすばらしい存在で、何かしらすごい大人と思っているのです。したがって、子供は先生のことを常にじっと見ています。そこには命と命とのぶつかり合いがあるのです。子供たちは、さまざまな日常の感情を素直に表現し、行動に移すことになるのです。大人の立場からすれば、子供のこのような行動に驚ろかされることは多いものです。いずれにせよ、やはり真実の目を持つことが大切なのです。したがってどこに真実があるかを見極めていくことが大人の役目なのです。また、自分自身を含めた保育や幼児教育者の役目であるように感じております。このように考えると、自分が選んだ職業の意義とその仕事についての生きがいを感じずにはおれません。けれども現実には、毎日が子供たちによって教えられることばかりです。保育者はそれに応えるために一歩ずつでも前進しなければなりません。

このような日々を過しておりますと、学生時代に、あの根の谷川沿いの土手道を歩きながら語りあった日々がなつかしく思い出されます。落ち着いていてのびのびとした環境の中での学習研究は、さまざまな想像性と創造性を与えてくれました。広島文教女子大学で学んだことは、今日になっても自分の中に脈々と生きており、毎日の保育実践の中でさまざまな活動となって大きな役割を果たしてくれているのです。中でも、大学祭に取り上げた日本昔話「恩返し物」の分布図と内容は印象的に思い出されます。いろいろな目標に向かって取り組み、挑戦できたあの頃の若いバイタリティー、自分をみつめ、自分に厳しく、自分で自分を伸ばそうとする気持ちを与えてもらった学生時代だった。今日になってやっと気付くことの多さに驚ろいています。

また、真剣な態度の学長先生のお言葉は印象的でした。入学時に「心を美しく持つように」と教えていただいたことは、いつまでも心に残っています。素直な心で自分をみつめ、自分に問いかけながら前進するようにと

話されたように記憶しております。保育の道にこれをお  
てはめてみれば、自分を伸ばそうとすることが、子供た  
ちを成長させることにつながるのです。自分自身、保母  
であるということは、常に自分が子供とともに成長する  
ように努力しなければならぬと自覚を繰返す毎日で  
す。

(短期大学部幼児教育学科昭和五十一年卒業)

## 保母の道を選んで

高橋夏枝  
(旧姓松山)

入学前の希望がかない、卒業と同時に東広島市保母と  
なり、一生保育の道で働き続けたいと決意を新たにした  
のはつい先日のような気がする。それ以来、早くも四年  
目が巡ってきているのである。今日のような就職難の時  
世を考えると、私は大変幸運であったように思う。しか  
し現状では、私たち保母の世界には広島文教女子大学卒  
業の仲間がまだまだ数少ない。今後、私たちの後輩がま

すます増えて、共に理想の保育を求めて力強くがんばり  
たいものと思っている。

毎年、夏頃になると、私の勤務する保育所にも実習生  
がやってくる。彼女たちの行動を見てみると、自分が年  
ごとに学生時代の思い出から遠ざかっていることを実感  
させられる。学生の若さや純粋さは何事にも変え難く、  
自分自身の実習の頃をなつかしく思い返すことが多い今  
日この頃である。特に、母校の広島文教女子大学の幼児  
教育学科からの実習生に対しては、それまで全く面識の  
ない方であっても、その雰囲気の中に、何か言葉に表現  
し得ない、同一の空気のようなものを感じてしまうのは  
不思議である。

私には、在学中の忘れ得ない思い出の中に、今日なお  
心から離れず、日常の保育実践の中で大切に心掛けてい  
ることがある。それは、私がちょうど保育所で実習中の  
ことであった。実習中であつたので、保母の活動、特に  
父兄や子どもとのコミュニケーションについては、あま  
りわからない状態であつたが、ある保母さんの行動に私

は愕然とした。それは、特定の環境の子どもに対する差別的態度であった。その子どもがかわいそうで、それは実習が終了しても、いつまでも脳裏から離れるものではなかった。実習後、大学での反省会で、実習中の出来事や悩みなどについて大学の先生方と話し合う機会が設けられ、私は、そのような態度について、やるせない気持ちをすべて話した。この時、ある先生が大変ていねいに細かいことまで話してくださり、私の気持ちはずっきりとおさまった。また、それと共に、この時、将来自分は、子どもを差別したり子どもが理解できない保母には絶対なつてはいけなないと、心に刻み込んだのであった。

このような実習時の経験から、実習生を迎えるたびに、私は、実習生の目に映る自分の保育者像を意識しながら、一生懸命がんばっているのである。

このように、私の母校は、学生と教官のコミュニケーションも密で、人情味があり、ファミリー的であり、保育者養成の環境としては、すばらしい大学である。私は、学生時代から今日までのいろいろな出来事を通し

て、自信をもって「自分の母校にほこりを持っている」といえるのである。就職後、一、二年で訪れた理論と現実とのギャップに対する失望に対しても、大学時代の先生の言葉に教えられた保育者像を根底に描きながら、明日の子どもの幸福を願って、力一杯努力して来ることができたのである。卒業して四年経った今日でも、原点に帰ることができる自分は幸な人間だと思われているのである。

（短期大学部幼児教育学科昭和五十四年卒業）

## 大学との出会い

恒松 真理子

つい先日、本大学の入学試験のため、キャンパスにうら多勢の高校生を園バスの中から見ながら、四年前の自分の姿を思い起こし、懐かしさと人生の不思議さに思わず微笑んでしまいました。

四年前の入試の前日、大学の門前から初めて学舎を見

つめた時、今でもどうしてあんな気持ちになったのかわからないが、その瞬間に、「ああ、私はここで学んでいくんだな。」と思ったのです。その予感的中という訳ではないのですが、二年間、本当に楽しく、有意義な学生生活を送ることができ、感謝の気持ちで一杯です。

もし今、「あなたが学生時代に得たものは何ですか。」と尋ねられたなら、まず、「それは良き師、良き友に出会えたことです。」と答えることでしょう。確かに入学してまもない頃、「小さい大学だなー」と思った事もありました。しかし、卒業する頃には、小さいからこそこんなにも思い出多い学生生活が送れたのだと痛感したものでした。

先生方は、私たち学生一人一人を大切にしてください、相談などにも親身になってくださいました。また研究室での雑談の中にも、それぞれの先生方の私たちに對するさまざまな想いが感じられ、ずいぶん助けられました、考えさせられたりしました。特に就職シーズンには、担任の先生はいうまでもありませんが、担任でない

先生方も一生懸命になってくださり、「なんとかこの子の希望をかなえてやりたい……」といった想いで懸命になってくださっている先生方を眼のあたりにして、がんばらなくては、という思いと感謝の気持ちで一杯になったものでした。

そして共に学び、共に一喜一憂した友だちがいます。卒業してもその絆は途絶えることなく続いています。それもあの意義深い学生時代の環境の中で培われたものだからなのだろうと考えています。友と会って思い出話をするたびに、この大学に出会えて良かったと今さらのように喜びを感じ、誇りに思うのです。

二年生になって就職シーズンに入り、「ずっとこの学舎から離れたくないけれど、幼稚園の先生にはなりたいたい……」と思っていた頃、今年は採用者なしと言われていた附属幼稚園の採用試験の掲示があり、自分がどうこうなるのかいうのでなく、暗闇に一筋の光が射したような感じで、何故かとても嬉しかったのを覚えています。実習先などの園よりも共感が持て、また理想的だった附

属幼稚園に自分が採用してもらえると知った時の私の喜びは、いうまでもありません。

就職して二年目、子どもたちと、他の先生方と楽しく過しています。大学だけでなく、ここでも「良き師」に出会い、教師という立場だけでなく、さまざまな方面から自分を成長させるような刺激を受けています。この大学に入ってから今日までの自分を振り返ってみて、本当にすばらしい人々と出会え、そのことによって自分が少しずつではあるけれど、大きくなれているようで、一言では言い尽せない想いで一杯です。

今でも、私はこうなるべくしてこうなったのかなーと、何だか不思議な気さえます。四年間、同じ道を自転車でかよいながら、この大学に出会えた喜びと、人生の不思議さを感じつつ、もうすぐ五年目を迎えようとしています。

(短期大学部幼児教育学科昭和五十六年卒業)

## 自分自身を磨く

高橋由紀  
(旧姓藤倉)

私は昭和四十四年、文学部国文学科に入学いたしました。私どもは第四期生で、ここに一年から四年までの学生が揃ったのです。当時、まだ大学構内に講堂がなかったため、入学式は附属高校の講堂で行われました。このように設備は完全とはいえませんでした。何よりも先生方の若い情熱と、先輩方の自分たちの手で広島文教女子大学を創造してゆくんだというエネルギーが、学園に溢れておりました。そして、この情熱と意欲の間には熱い血が通っており、私たちもその洗礼を受けました。

高校時代とは別の、つまり人と競争することではなく、純粹に自分自身を磨いてゆこうという気持ちで、毎日の講義に耳を傾け、クラブ活動に力を注ぎ、寮での集団生活を送っていたことが思い出されます。もっとも、

四六時中そうであったわけではありません。時にははめをはずして、先生方にご迷惑をおかけしたことも、もちろんありました。ともかく、よその女子大には中味で敗けたくなかったです。うちの大学が、名はともかく、実では一番だと思っていました。この気持ちは現在も変わっていません。年を重ねるに従って、この気持ちはますます強くなるばかりです。

どこの大学に、卒業後十年も経った、できの悪い卒業生、それも一主婦のことを覚えていてくださって、便りを出せば必ず温かい返事を書いてくださる先生がいるでしょうか？ 青春時代の四年間を広島文教女子大学で過ごせたことは、私にとって本当に幸運であったと思います。現在の私の出発点は、広島文教女子大学にあって、しみじみと思っています。知識はいうに及ばず、血の通った人間同士としてのつきあいを厭わずしてください。先生方、二十歳前後の小娘の生意気な意見にも正面から真剣に答えてくださった先生方に、改めてお礼を申し上げます。

在学中の最大イベントは、横山邦治先生と共に歩いた東海道五十三次でした。いまも目を閉じればその一コマ一コマが鮮やかに甦えってきます。その時の仲間、先輩たちとは遠く離れて暮す現在も、最も信頼のできる友人関係にあります。

私事になりますが、私は特待生として、四年間大学にお世話になりました。しかし、微力な私は愛することの大学に何のお返しもできません。ただ、広島文教女子大学、武田学園のますますの発展を天に祈るばかりです。在学中の学生のみなさん、先生方の情熱の中に飛び込んでいってください。そして、広島文教女子大学をより一層、すばらしい母校にしていってくださいますように。

(文学部国文学科昭和四十八年度卒)



## 小ぢんまりとした大学の味

岡野愛子  
(旧姓村上)

五十二年卒業生は、一、二年のときは短期大学の人のたちとの交流もあり、そんなに親しい関係ではなかったのが、三年になって同級生が少なくなつたせいか、クラス全体が今までになく親密になつたような気がします。卒業前に、松江方面に先生方も交じえて旅行したことは、今でも楽しい思い出として心に残っています(例年はない大雪だったと記憶しています)。

私は二年間、『淳風寮』で過ごしました。一年のときはブロックごとに二名ずつおられた先輩に何かとお世話になり、二年になると後輩たちと仲良く暮しました。冬、ボイラーの故障でたびたび入浴できないことがあったのにはまいりましたが、食事当番や電話当番は、いろんな話をしながら楽しくできました。同室だった二人の後輩とは、彼女たちの方が先に卒業したわけですが、今

でも時々連絡しています。

また、私は『マンドリン・クラブ』に所属していました。定期演奏会にむけて合唱したり、夜遅くまで練習したことなど、今思い出すと、よくあんなことができたなあと思います。学生だからできたのだろうと思います。

楽譜のコピー、練習場の確保、会場の申し込み、パンフレットの作成など、いろいろな苦勞がありました。夏休みにになると、合宿費調達のため、司書講習会の受付のアルバイトをさせてもらいました。泊まり込みで受講する人たちもおり、在学中に司書の免許がとれるありがたいさも感じました。附属高校での教育実習中に、夕方合宿所へ行き、夜中に自転車を下宿へ帰ってきて、翌日また学校へということもありました。

友達について先生方の研究室へ行って話しをしたり(聞いている方が多かったのですが)、マンドリンクラブの部長をした大学生活は、積極的な方ではなかった私にとって、マンモス大学では経験できなかったことばかりでした。

オリエンテーションでの山登り、生物学の講義で太田川に入り魚を追いかけたこと、寮祭で歌ったこと、大学祭で綿菓子を売ったこと、学校を去っていく友のお別れ会を教室で坐りこんでしたこと、ひんやりとした図書館の書庫で必死で文献をさがしたこと、休講のはり紙をみて喜び、下宿へ集まって楽しくしゃべったこと、友達の下宿へ泊まって話しあかしたことが、卒論をしあげるまでは正月も帰らないといいながら、さっさと家にみんな帰っていったことなど、思い出せば際限がありません。

(文学部国文学科昭和五十二年卒)

## 教壇に立ってみてわかったこと

上 田 志鶴子

卒業して早くも十余年が過ぎ、静かな山と川の町であった可部も、マンモス団地と、県北への主要路として一変しています。在学当時は、現在の巨大住宅地への胎動期ではあったものの、上原の大学校舎は桑畑に囲まれ、

根の谷川の土手は草が茂り、木橋が架かるのどかな町でした。

私たちは、文学部の一回生で、短大の先輩はいたものの、創設期であった文学部は、先生方学生共々、学内の充実めざして活動していた時期であり、マンモス大学では考えられないほど先生方と親密で、教官室もオープンで、時には予習まで教官室で教えてもらったり、放課後は先生方とお茶を飲みながら、文学の話や先生方の体験談を聞いたり、機械室に卓球台を持ち込んで、対抗戦をしたり、グラウンドでソフトボールに興じたりする事もよくありました。そのような初期の一二年が過ぎ、学生たちがクラブや同好会を結成し、活動を始めると共に、先生方との和気藹々の放課後の団欒も消えていったように思います。

学友会も当時発足し、短大と合同で文化や運動の各クラブが活動を始めたのですが、学友会規則やクラブ設立の方針等、他大学の学生総会に内緒で見学に行き、メモを持ち帰り、会則やクラブ予算の折衝等の参考にしたも

のです。また第一回目の大学祭の時には、国鉄の枕木を買い集め、ワングル部員総出でファイヤーを組み、市内のデパートや商店に出かけ、パンフレット広告の協力をお願いして歩いたのも、すべて始めての経験で、学内総動員で健闘したものでした。

卒業以来、何人かの先生方のご訃報を聞きました。国文学の山根先生、ワングルの武井先生、ディケンズを熱心に教えてくださったベレー帽の田辺先生、やわらかい口調で漢文講義をされた西谷先生と、わが広島文教女子大学の礎を築いてくださった先生方のご訃報を聞くたびに、母校が遠ざかっていく感におそわれます。

「古はものを思わざりけり」と、古い歌にあります。自分が教育に携わるようになって始めて、かつて先生方が親身になって、気づかせよう、身につけさせよう、とご指導くださった事に気づき、教える立場の願いがわかり始めたように思います。また、いつの間にか、自分が教わったとおりを教えていたり、いわれたとおりの事を生徒たちに行っているのに気づき、恩師のお顔を思い

出して苦笑する事もしばしばあります。

「後姿で教える」等といわれますが、「少しでもお役にたてば枯木も山のにぎわいだよ」と謙虚に話され、シエークスピアを教えてくださいました浅地先生を始めとする当時の恩師の先生方のお姿を思い出しながら、いつまでも謙虚な気持ちで歩んでゆく事が大切であると、常々自分自身にいい聞かせています。

現在でも、学長先生や小田先生にご相談したりご指導いただく事もあり、一人立ちの身になってもなお激励し、ご指導くださる恩師がいらっしゃる事を本当に心強く感じます。女性の社会的活躍も望まれ、生活面でも教育面でも、高度の知識や技術が要求されてきており、女性の教育は一層重要となってきたと思います。至らない先輩をのり越えてくれる多くの後輩が育ってくれますように、お祈りいたします。

(文学部英文学科昭和四十五年卒)